

昭和三十一年十月十五日に建立されたこの石碑の横に

河水滔々流不尽 (河水滔々といふ流れて尽さず)

藤田広々永無窮 (藤田広々と永無窮)

記者 柴矢時彦 明治二十三年八月

と刻みこま水た、小田井路横堰改築記念碑があり、仲よく並んで灌漑のいと有ふの歴史と伝えています。

この二つの重要なる石造文化財は、国道一〇号線、二一と号線が往來する無数の自動車も、静かに眺めていす。生い茂る夏草に囲まれている。

近くの番五大橋は、歩行者、自転車専用道路も取り付けられ、更に、大橋幅工事が建設省へ九州地方建設局佐伯工事事務所の指導の下に、オリエンタルコンクリート株式会社によって植し進められていす。

また、番五大橋のたもとには、大分県交通機動隊南隊佐伯警察署番五校所が、佐伯本城消防署西部分署等が設けられていす。

番五川の堤防は、「建設省番五川水質自浄監視局、番五川水質観測所、位置一林生所大宮小田、設置年月日一昭和五十年十二月、設置者一九州地方建設局佐伯工事事務所」と標示された建物の目につきます。

八月十一日、番五大橋の上流五十米余をコンクリート製、小田井堰二百五米の長さの、おもてで、沢山の石と土が築しそうに遊泳としていす。竹森の父兄の方々に河川敷に遊歩して、水遊びの子どもたちの戯れをしていす。

これらの人々は、二八〇年前に農業用水のために造られた小田井堰・水跡の歴史を知っているのでしようか。

(おわり)

人物小伝

天放・秋月新太郎の横顔

佐伯岡谷の陸軍墓地「佐伯招魂所」に西南役官軍戦没者の巨大記念碑「敵愾之碑」がある。その碑銘に

豊月の果敢徒瀟瀟 官軍防戦し 雷撃電撃す 敵王の復讐 争うて鮮血とふみ 死を視ること 帰するが如し 何ぞそれ壯烈なる。まことに美しき、胸の谷、こころを骨を埋む。生鬼子哉、凜乎として滅す。

正六他魚三平 秋月新太郎撰並書

とある。ただし佐伯第一の壮大な記念碑である。

秋月新太郎は佐伯藩士秋月橋門の長子として、天保十年佐伯城下に生れた。幼少の日藩藩邸敷堂に学び、安政二年十五才にして日田或宜園に遠去、後藩に帰り、四教堂の助教となつていす。

明治四年父に後つて上京、兵部省出仕中録に任用さる。時に新太郎三十二才、明治八年三月兵部省の職員録に見ると、陸軍歩兵少佐佐伯八位乃木希典と秋月新太郎の名が並んでいす。

明治十年三月西南役初参、新太郎は官軍参謀山県有朋の側近となり、戦乱を体験、平定後血戦田原坂に「崇勲之碑」が建てらるるにあり、その碑文の撰書をしていす。

後、新太郎は兵後を去つて教育界に転進、ついで東京を師範学校長を勤め、勸業貴族院議員となり、大正二年(一九一三)東京に没していす。片なし、佐伯出身者として名を成した点、矢野龍渓の「第一級の人々」(天放と号し漢詩人として有名である)に

「これしいことには佐伯には秋月新太郎の撰書になる碑文が多い。前掲の「敵愾之碑」の外「高妻芳洲蒙碑銘」、「高野表之碑」、「野表之碑」、「床木孔道之碑」、「金馬橋之碑」などがそれだ。それらの事跡を端正な筆跡で適確な撰文で撰せられ、いすれも史料としてすて貴重である。

(月葉)